

題黃源
 鳥亦說經似度他
 林間花若諸菩薩
 又題一谷
 打落平家無敵兵
 敦盛熊谷進運速
 落髮之時
 東山山下玉毛頭
 移得天台真羅漢
 題男根
 我此貧裸八寸強
 一生不觸美人手
 題那須與市
 夜來抱汝臥空床
 懷鼻揮中日月長
 平生所望一時休
 今日出家作比丘
 一朝懸向上時聲
 九郎冠者大高名
 中有黃鶯小釋迦
 樹頭樹底妙音多

與一源平第一弓
 塞目所念鞍馬上
 題宇治川先陣
 賴朝大將秘藏馬
 生食前非塵墨後
 題蚤
 坂耶妻耶是無物
 雖爲人喰十分肥
 歲且
 有錢有酒有金銀
 當寺他山若僧達
 懸
 日夜思君長不忘
 夜深戀慕空床
 判官召道射成功
 七花八裂扇真中
 宇治川先陣給之
 梶原源太一鞭遲
 元來見來更無骨
 瘦僧一捫沒生涯
 今歲初成大德人
 未申案內往來頻

夢中携手欲相語

被隊曉鐘一又斷

同

花咲花而易老花
花時花亦可情重

花顏花盛夢中花
花落花過誰問花

同

生天成佛開思君
有力秋風不應拂

灯下吟詩瘦十分
胸關鎖斷楚山雲

飯在中央盛曲盈

饅頭無味鉄崑崙

懸懸三酒性靈水

水出推流地獄門

布袋依袋眠

人言是座禪工夫無一字

大食腹便々

湘江暮雨楚雲月

無恨風流夜々吟

學道參禪失本心

漁歌一曲價千金

扶桑國裏沒禪師

東海兒孫更有誰

今日窮途無限淚

他時吾通竟何之

東海兒孫誰正師

正邪不辨尽偏知

狂雲身上自尿臭

飽簡封書小飽詩

同

或儒者或教育家僧

不_レ管_二人_一天_二大_一衆_二僧_一

飛來蝙蝠暮堂裡

怪長_二無_一明_二滅_一法_二燈_一

悟の歌

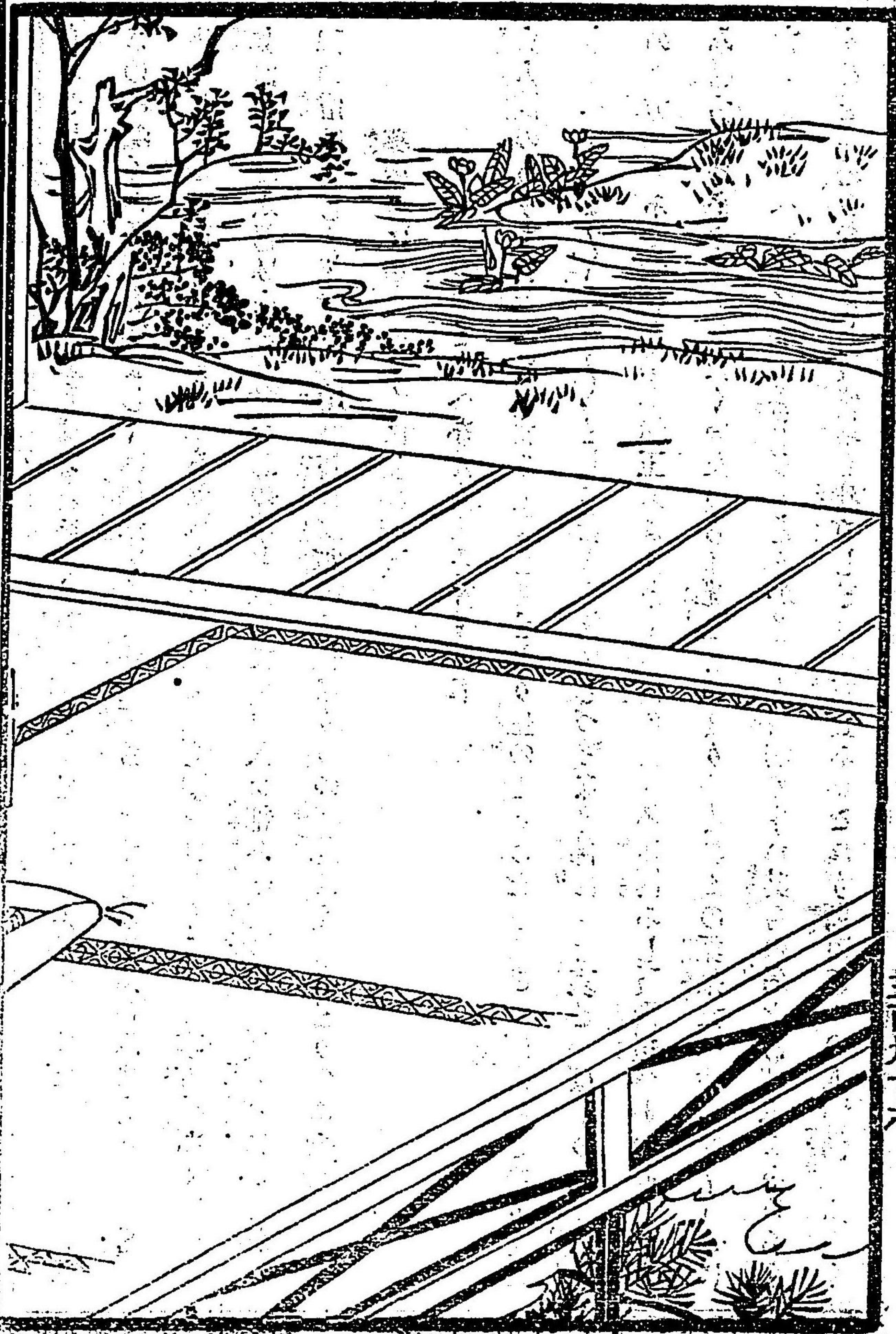
○とちと葉のおぼろふそまめ露の身いたし其まゝの眞如實相
 ○佛とてはのふもとをるころろこそまよひの中のみまゝなまをける
 ○ちればさき咲けり又ちる春との花のどがたど如來常住
 ○ぬらしつる袖のなみだののこくまをなれ面かげの月を立そふ
 ○おのづから身といたづらみ成おけりこくろを常のすみ家と思へを
 ○かぞの世にあだなる露の身をもちて干とせをいはふ人のたかなさ
 ○世のうさにかへてそみぬる柴の戸お問とじかはなる人をぢらめし
 ○妙なまし法のとちとの花の身と幾世ふるとを色とのはらぎ
 ○其まゝにうまれおからの心おそねがとすとてそやとけあるべし
 ○露とさへまぼろしと覺ぬ稻づまのうげの如くに身と思ふべし
 ○おげとなよ誠の道はそのまゝふたつともなく又三ツもなき
 ○らくくも心にてまそ彼岸おわたるもやすた法のふな人
 ○生死のまへえりしらめ坊さまと犬の衣をきたるあるべし

○奥山おひそをすとも柴の庵おろのらよて世といとふべし
 ○國いつく里といかおと人とは一本來無爲の物とまたへよ
 ○焼すて、灰おまをきと何ぞのか残とて苦をと受んとぞ思ふ
 ○忘執の雲をとらさで終る身のなり果を見と地おく成らん
 ○茶ふりたつ野邊のわかれをいつはでかよ所に見なして身と残らん
 ○ひい／＼お行末とほ之成にけとみつをかきまのいのちあるらん
 ○開もとにわが心をやかしぬらんそくある道を行つぬる身は
 ○すみのぼる心の月の蔭とれてくまなきものた本の境界
 ○とかなくもあすの命をたのみ哉たのふと過し心おらずや
 ○ととり得て心のやみの晴ぬればまひもなまけを有わ茶の月
 ○三日月のみつればかけて跡もまじとわかにはたわり明月
 ○とるとは咲るまゝのを見るときおまほとかなしや身こそつらけれ
 ○待得てもはせりあかどし郭公とをもとをむてらつち行らん

○年々にしぐれのそぎるもみら葉を四方のうつらふためしとしれ
 ○月と家あるオオ主と見る時をなかりの世のすまぬけり
 ○あゝろをば墨の衣に染なして身をたう死世の道まかせて
 ○寺を建堂をたてたるくせくとりたゞ常々のじひやましなん
 ○しげにいたの一筋かよふやど野邊ののむねをよ所見のそり
 ○色相と其たさくくみかさるども不生不滅のあゝろかはらし
 ○見るよどに皆そのまゝのすがた哉柳はとどろ花はくさなる
 ○前篇より一休和尚は母君の水のいみ目さし卿なんといふかな書法語を書て進
 せらぎしのちまた昔よりの祖師知識方の教化ありし言の葉をいさてかな文
 とさし念頃示し玉ひ一文
 往昔今お至るまでうた身の有さま夢の如くよさへ思めされいへば何事も心のとまる事
 はさうましくい愛を佛はくはんねん有て法華經の文に觀彼久遠猶如今日おほのべい此文
 の意んかの久しきととさ事を見玉ふお同き今日のとくに見玉へどの事にて天地い

らけとじまりしより已來のはるとさしと万の事をさとたまふどの事にていしかれを
 さのみ深くは不審あるましくい佛法とやと生者死苦をいましめ玉ふのみさらみ心をどい
 めても其のひささの諺と見まひらせしを先禪家よもちひやひのやうやひ事證據さくいへを
 如何とおぼえ召ひやと存ぞかしの事を大かた引入ひ都お夢想國師とて日本にかくれな
 死僧のましくける其頃ハ尊氏將軍の代なりこの夢想よくしさとりのの歌よ
 夢の世にゆめのとくに生れ来て
 つもと死へおん身おそやすおれ

夫人間のありさま万事とよまるとなしめとより生のとじめをしらざれば死のをりをを
 さまへせやましくばうくとして苦の海にしづなを佛を哀とおぼしめきて色々
 のは方べんおて衆生をすくひ玉ふささども人間のあゝろ不同おして惡道へおもみをそい
 み善方へは心すしとたくりたづらよ光陰をおくりあこれこの業果たへすあましく教に
 たかふといへども名利の善をなすことをかまなり名利とす其身の名をあげ人よめらる
 んと思ふ心をたねとして堂塔を建立しとこの富貴おこれり斯のとくの人塔佛のふく



知らんせ玉ふまよどの道と万事法度をそそぐす世にしたがむてのたく法を守る人を佛道
 に成就の人とやなりは年もとやくれ近く成らせ玉へは何の望はざしんや殊さらちお
 くれ話をもしめされしうへに行く水のおど々には心をもたせ玉ひては胸のすちよ何
 事なさなくいへ世尊は一跡の身とほざるべ々いよをよとけ三部經よ已心の彌
 陀唯心の淨土とのへ玉ふ此文字の心とおのれがよる彌陀たこころの淨土とすこの
 れを十萬億土はほねがひあるまぶとい

佛とてあふをいとまの苦むいろ

たゝ慈悲心にしくものをさす

此うたのおどくおほじもよういへ何事も佛心と見まゐらせやべく古しへ舟田のほと
 うじやうにて宗建をえじめまゐらせ人々すぎさせ玉ひし事夢ととおぼしめされしや
 までもつくしがたさとかやうおけあげよ入してはたくしもながらる佛法の事とす
 上まのらせしは事と他生の縁ふかくとどんじい因果經お自以唯ならんと佛もほのべい
 た母あつしものは七十六あて去年相りてられし心昌とすせ志辭世の歌

世々ごとに見えつかくれつすむ月の

このころぬ色球たきかまらまじ

此歌をくちすみて其のちこそれさまへ参りては菩提の心をすゝめやいへとくりかへし
 やされいづるのほめいをそそがたがたくどんじしてたびく参りいづる母よつしもの
 事おもひ出し参らせいへを一志ほそなぬへ参りた之社いへえやそれさほのほ覺悟も大あ
 んらくの道には心つきいへい處で度満足いたしいほさぐさみあどおとほかんたんもしか
 るべくいほ心つくしては夢々は沙汰いさまくい大般若の文お一切不行を佛の行とすとほ
 座候愛をとつて昔さる知識のうたお

あら樂や虚空を家と住なきて

まゝろおかくるそらさへとなし

出るとも入とも月娥おをえねば

心おかゝる山の端もあし

まれと生死にとりおえぬとまろの歌よて候よくくはくふさあるべく候又弘法大師のほ

辭世に

今とや後世のつとめもせざりけり

あらんの子の二字のあはれをよめて

いづれもさぞとの人とのやうな日まわさしやうすおかれ候また慈鎮和尚のうたふ

かりの世にまた旅ねまてくさなくら

ゆめの世おまたゆめを見るかな

引よせてひすべを草の庵おて

とをれをもの野はらなりあり

是と色相のうへをかると思しめし候へとの心よて候いつの日いつのと死は大事來と参ら

せ候とも心のうち何事も思召候まぞく候病難もしいたくせは來候ともそのくるしみ

おまのせて相果候へど大唐の黄檗禪師の傳心の法要とすおも書たのれ日本おてと聖徳太

子病なんのと死は歌遊をされ候

うた雲のいくもりのれ空よ消

月はくまきさひかり成あり

此歌のおろろと何事もとりわひ候とて無念無想の所をもちも候へとの事おて候又もら
の開山はうたに

何事も夢まぼろしとさとり來て

うつろひ世のすはるなりあり

此哥のおろろといかある大王死さき其外上下の人々のなしみ玉ふと死の道にて候おと娘

さへはかくお候へむすあはれ安よりの浄土九品のれんげおまおはれて大安樂の身とな

らせ玉ふべく大世尊の法説法も女人成佛のかたき事をかくと死玉ふかやうの事を聞お

し免して道心すてさせ玉ふまぞく候其よとはりを荒々やあげ候男子お生をうけや候て

のこらす成佛はべきおあらずとに龍女と八才よきて三國名を殘しや候は經にもは免玉

ふ然は女人おそなほもたのもしき事おて候へば成佛とてべつまたつと死ひのりもはな

ち奇特をも見せし事はあるまぞく候はさとり的心中よあれど不審候はぬと思召候事

は座おく候と大のさどとや事にて候佛は入滅はち祖師先徳のさたえ玉ふは法よも見

理受用のふたつよては入候三どくをも太儀に思しめしやし之候五戒百のい五百かいを
 たてらば候事もたゞ一身のよたては入候は女房衆のほさど有り候
 さき檀林皇后あり其外人の敷をしらす美濃のくふと興性寺の千代能とや女さたりて候
 其哥ふ

とふのをよたくみし補の底ぬけて

水たまたねは月もやどらす

のやうの事を聞しめして今日より禪宗のさんかくふ心をつくし玉ふべし愚僧は手を引
 やすべしまづくくさくさぐのほ心をとらせ給ひ後世をたすのり候へんとはかぞへ候
 とすめゆもの何者ぞや又のやうふ不審をうけやもの何ものぞやと目に見ぬすて
 さましくなりゆくもあよ六道りん糸のたねと成とを佛これを三どくと説給ふ一にけん
 ん二よりの腹立るも三にぐちの心この三つをたち候へといふしへ今よいたるまでしめ
 とありあれをしらすを愛さうけ心ふかき故よ人をねたそしりのれをうらみまんぞて
 めがひに苦しみのなみだを流し袖をしぼるあり是みか一心れどさなり久しく遠き事を観

志物をわびれざるも一心なり四百四病をきけ大苦をうくるも一心之雪霜のさそき事をい
 どひ大温を苦となすも心ありされば此心一ツを取どめがた茶れを六道のおうたへす生に
 生をのさね死お死をつぎうさ沈むのみなり此心といふそのをいかふとんじやお影かた
 ちもな死ものありのたちあさ故お消せすしかれば生もなく死もなしあを佛ども金剛
 の正体とせのべ給ふなり無相にして有たるが故お古來より行といまる事なし住所さら
 なし色相の生滅よわづのるふとつて無常と説き又の大死とのべて是を怒みかなしみて定
 離とやこのやうみや入いのほ心よかたちなき所地はらんせられいへど事あり何もの
 か色相をさつて佛神とを鬼神とも成すべしなり淨土の穢土の事ありを以ては分別ある
 べくいほ不審のほさ候といまよひの雲千里萬里の外にはらむ一つとしてほ心といまる
 事あるまぞく候よを大正覺とやなりこにいたると心結も色即是空空即是色とよき
 給ふ一心の外にべらのものあし本より經もなし心と無始無終よし住所を愛淺開て
 天地草木の畢竟して見る法のあさくい見ざる法はふのしりやう生死のさづなをいなれ
 て大解脱のは身とならせ給ふべし



此工夫も古則話頭は不審はなれ候と仰られ候尤も候ひのしのは僧たちの集め給ふお
 そらへをゆら／＼かきにてはあぐさみよざるし参らせし
 本来の面目のしめしやう不思議不思議未生已前いづれの所よと来る又いなるが是本
 来のめんばくと斗もどひや候此言葉とらるとりて三十日五十日乃至一年二年くふうをど
 けて案じややうは我が身の生の所と佛をいづれの祖師もしられましくは佛祖ふしぎの所
 是にて候とや候へを此上よじゆとていろ／＼大事ゆるくし長老やれ候間また是を
 工夫してややうの天地開闢よりこのかた知られまじきと云ふとす愛もて長老尤のとし
 やされは學者の智にをしぬによつて其語をするなり大のた此分に
 はく老もしの話頭とていなるの是をさしさいらい意といふことにて祖師のいはく庭前の
 栢樹子とてたふ心をさんせよとやまかふして學者の曰祖師の再來庭前のはく老もしも
 同じ心にていたし天然の理めては前後老らぬ心めて候とてちやく語お松の直く荆とまが
 れりとや又色相分離してのちいかにと／＼松直のらす荆曲らすとや三度四度やのへして
 これに至極の道理とやと是は柳とみどり花はくれさひのころなり此極意之口といふ根

本無相ある處をしらんがためあり大かた此分よ
 萬ばうふりうといふ古則よろづよ友たらざる人これ何人をやと問ふがくしや耳をそなた
 てし是を聞て年月へてややうと我が一心と萬法の外めては躰も色もな之候物にくみせぬ
 ものよ候しのも天よおほひ地に満しければ左右もなく脚下ま／＼として有る故に
 法界一心とく／＼んじて大國のとう居士名を残すおれと目よ見ぬ物の有所を見出してか
 のとくや之地獄此とたやふれや心は入候也
 本有圓成の事やんらいの佛何の縁坂もつてめいとふの衆生とありたるをや學者くみずし
 てややうは根本と無念無相の佛なるを衆生の色縁おひのれてのやうよ寒うん苦樂を得る
 身どなと来て候愛お念をといめ此界よりんあきくと本身の佛性おなるとて此と種種々無
 量どなしさま／＼言葉をつくし善根しやうと見るなり
 あその話の事釋迦とろく／＼かかれが奴かれとたそのとどりをうとて年月をて老僧の前へ
 出て座上不和尙無く眼せんよ我がしとすて一味平等のとある何の差別ゆらんや然らば奴
 もなし我をなし上下元來佛を衆生も一躰ならずや大かた此分の心よて候

いのなるかこそ地獄と一めされて年月を経て工夫してやとやうと眼前これ地獄とや又と
ふ何事と地獄と色相とをちとくとなり色相分離してといのお眼光落地すこゝに見ゆす智慧
よよつて種々の語をうけ大利益無お落候てあさましく候

ことんかけざるどきといのん學しやのいりく小魚大魚を吞又かけてのちいり大魚小魚
をのむ此心と舟の帆かりりてあると死は大なる魚がらいたるをのむといふははのか
くらざるどきと小なる魚が大なるをのむといふはよりあり此よりと諸宗に少しと知
らす禪家の大事あり有とやさんとは世にある事を吐く語をのくし又無なる事をやさん
とてと世もあさ事を吐く心をのくして生死思推の處ををつかしくやさん爲ありは理りは
座候直むすべく候と

りんざいの三とや三とや事のいかりの事はやつくしがたくは天地の間も三つもとむ
三つくろしとや事何とや是をしかも三ばうとや事ありとく心の心入父母と我と是三つの
實なり一つもあけてと物あらすは三とやとみなとどの無性とくろさかたちなと出生し
て万の事と行ひは爰お大秘密のとわりよりの字これ則大事なり

大國のなんせん和尚此猫兒を切る事と大衆こたへさるもあさり趙州爰に來つてさうあむ
を取てかしらへわけ衣を具よめてと和尚のまへお出る和尚このときねまを切て後悔とて
うじう甚もつてめんばく成る第一お色相の逆意をさるあり迷ひの衆生色心どもお切とを
得すたまくと切といへどもとんだうなれを放るゝ所なし文珠のりけんいふたゝびつがす
とや必ふて候

りんざいの四かつとて人の死たる所よめたてかつとよの心たしかに心得たる僧ほれな
りたれとやうしもう僧とや本ぶんにおときておれを至極す古人の見理此所にあらずと
でよりんざいん命根本不絶といへりしかれを當時の僧たち大あるあやまちとやとやみぢ
くあして衣をかへ人の眼をつぶして布施物をとりおのれが生々世々ののはのやをまねく
あわれむべたの第一なり

百丈やこの話の事大しもぎやきていの人かへつて因果あるや又なしやとよふ答ていは
く因果に落すとなり此報よよとて五百生野狐の身お墮していんくとこれ然あるその
とややねにて候未さからずして別よふかた事は座候とんと思召まじく候此ふたいろの因



果と申すいんぐとよくらすとの事なり深く因果と云ふ心よて候此話問
 のまなことを生々世々の事をよつねよよせてとかれたる所大智あるもるよ大智禪師とかや
 やと一朝大國にていろく佛道一の行の事れんくよ上まぬらせ候又やと人迷ふと
 死と火をもつて火をけさんどく土をよつて山をかまはんやとかやうなる事ハ人々
 佛道お心の遠さる事萬里をへたてて手よと百八八んなるの死づなる珠敷をつまぐり
 二世三世をいのり生々死れずのたよりを見いだし石塔卒都婆あきとくのわりとおせひ
 梓ふかけて死人と言葉をのりす事をいひて袖をしぼるをろくくの教もろくくの道理成失
 ひ佛ばさつみまう語をのりけ義理をよきさいよくもうもくのとく竹のうちより天をよか
 る物と生々世々うのやとゆるべからす西方非西方東方非東方無地獄無極樂淨土非淨土等ん
 んをさらすしてしるも又まの外の大空さんまいおして大蓮化のうちあむたたい正直の
 ぞひぎやう無さんあり念を死つてしかも死らす是佛通力自在のさうとや之から國我朝あ
 いたり上下萬民佛道をねがふ事何宗かしうとて色々たててとありといへども其源いつ
 れも極樂をやらせよいたり地獄おむとすまざさとの方便之此淨土といふは何國なれを我

心のうちあむと又地獄といづれぞなれと大事我心のうちあり或人達广大師にとふ地獄
 えいづれの所ぞやまたへていとく汝が心中おとんじんちの三毒これなるとんぞんちとと
 貪の欲とや方の愛念執着の欲とやあま嘔と腹をたつる念をや痴とわくらて何事も心
 のまよふ事とをあげさ歎しみ我とわが心を惱ます事をやなり此三毒のくの如く善惡の
 報をつくり出し地獄おむつるなりぢとて別に余の世界よある事よとわらす又問極
 樂といづれれとあるぞやまたへていはく極樂淨土とて外みあるべからす汝が心中に三
 毒穢拂ふ處すなとち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへたて有る事なし迷ひの衆生此とんぞん
 ち我本心おてあは事をえらす一念おんし又にくむによりて地獄におつるありこの三毒を
 もととして八萬四千のぼんのう獲るありあれ則地獄なり佛といふもさるとんぞんも名は
 られれとを同じ道之わが本心をささる人をすあとち佛と名つくるなりまかれと我心の外
 に別に佛なは事をよく心得て此上を常々おるよかけは工夫あらを道よはゆたりゆとん
 事うがひあるべのらすは現在の果を見て過去未來をしるよは經にと死おかれゆこの心
 ハ今よよて悪心惡逆をこころよとそれすしてつしむ善事の心あつて取出し行ふ事之

今此生いまこのうしやうよみて其心そのこころをこそこれせず又今いまの心こころを未來あきこころへ引ひて人ひとに生なをいたすべしとの事ことなり佛ほとけを
 万よろづふ自在じざいを得えありといへども見みあたらざる事ことあり一ひとふの無縁むえんの衆生しゆじやう度たするごわたりす二
 よは衆生しゆじやうかいをつくる事ことわたとす三さんよとさうごを轉てんするごわたりはす前世ぜんせいのがうめんよと
 とのんどくしたる善惡ぜんあくのよつとらなりやうの決定けつていの業ごうのうをを佛ほとけばさつさつの身みにても轉てん
 とるとかあごす形かたちの善惡ぜんあく福徳ふくとくの大小たいたう壽命じゆめいの長短ちやうたん衆生しゆじやうの高低かうていの事ことおれら皆みな前世ぜんせいの業ごう因いんよ
 たれたる定業ていごうなり慈悲じひしんは福徳ふくとくの家いへあうまれ慳貪けんたんの貧苦びんくの身みおいたり柔和じやうわにんにくの
 心こころおろすがたご生なれさてて高位かうい高家かうけにうまるゝなり殺生せつしやうしたるもの短命たんめいおすはるゝ
 かくのどくいつれもみち前世ぜんせいの惡あくめんにとり惡果あくぐわを得えたる人ひとこのよととりをしりて今世こんせい
 よて惡行あくごうをつくらすば來世らいせいはかあらす善果ぜんぐわを得えべと事こと唐土たうどわが朝あさの祖師そし達たつとはじめ數多かずおほ
 知識ちしきのふみよも書殘しよざんし給たまふ事ことおもをきめし參まゐらす

一休諸國物語圖會拾遺畢

明治十九年八月四日 鵜刻御届
 同年 八月廿五日出版發兌

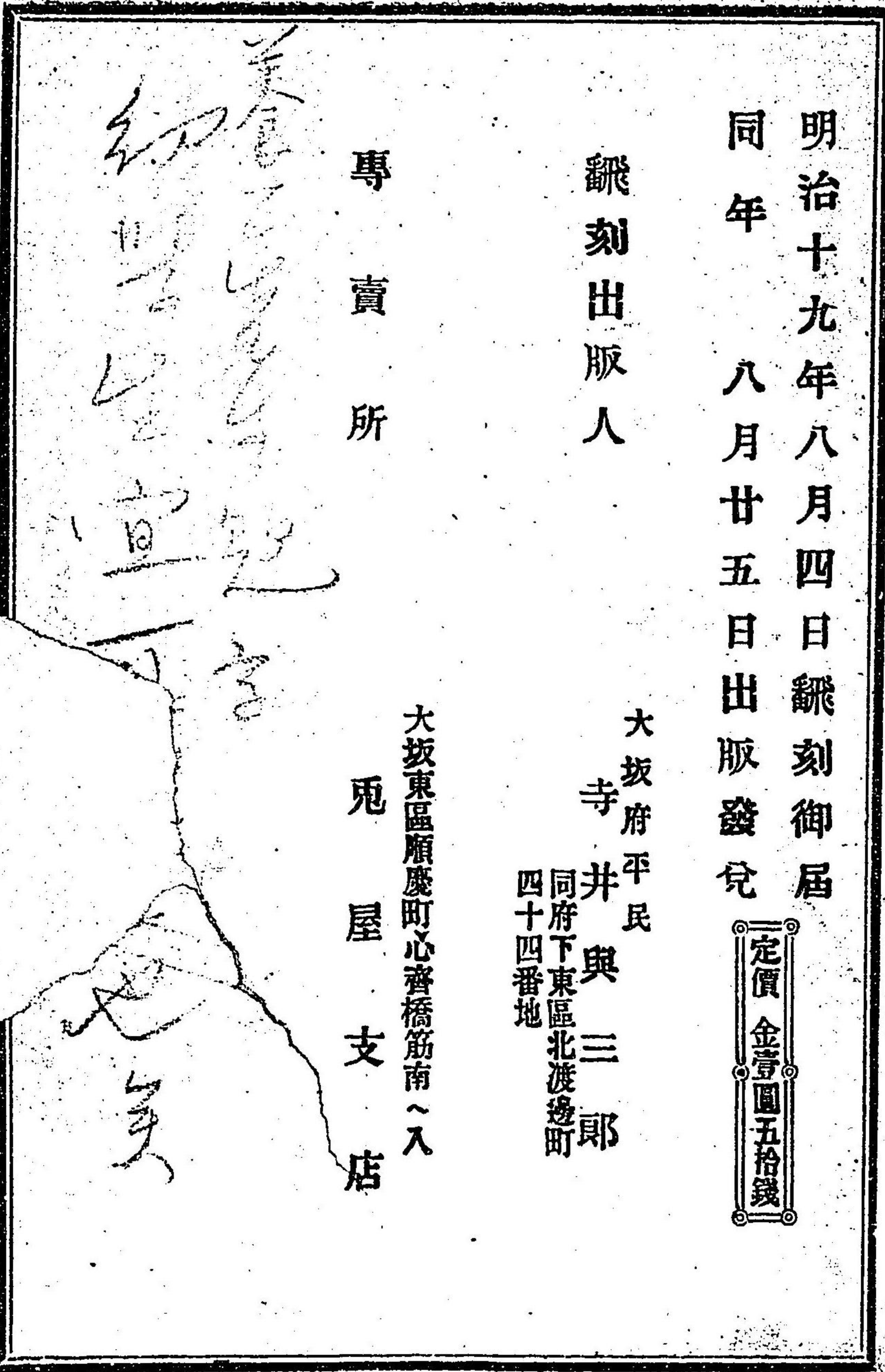
定價 金壹圓五拾錢

鵜刻出版人

大坂府平民 寺井與三郎
 同府下東區北渡邊町 四十四番地

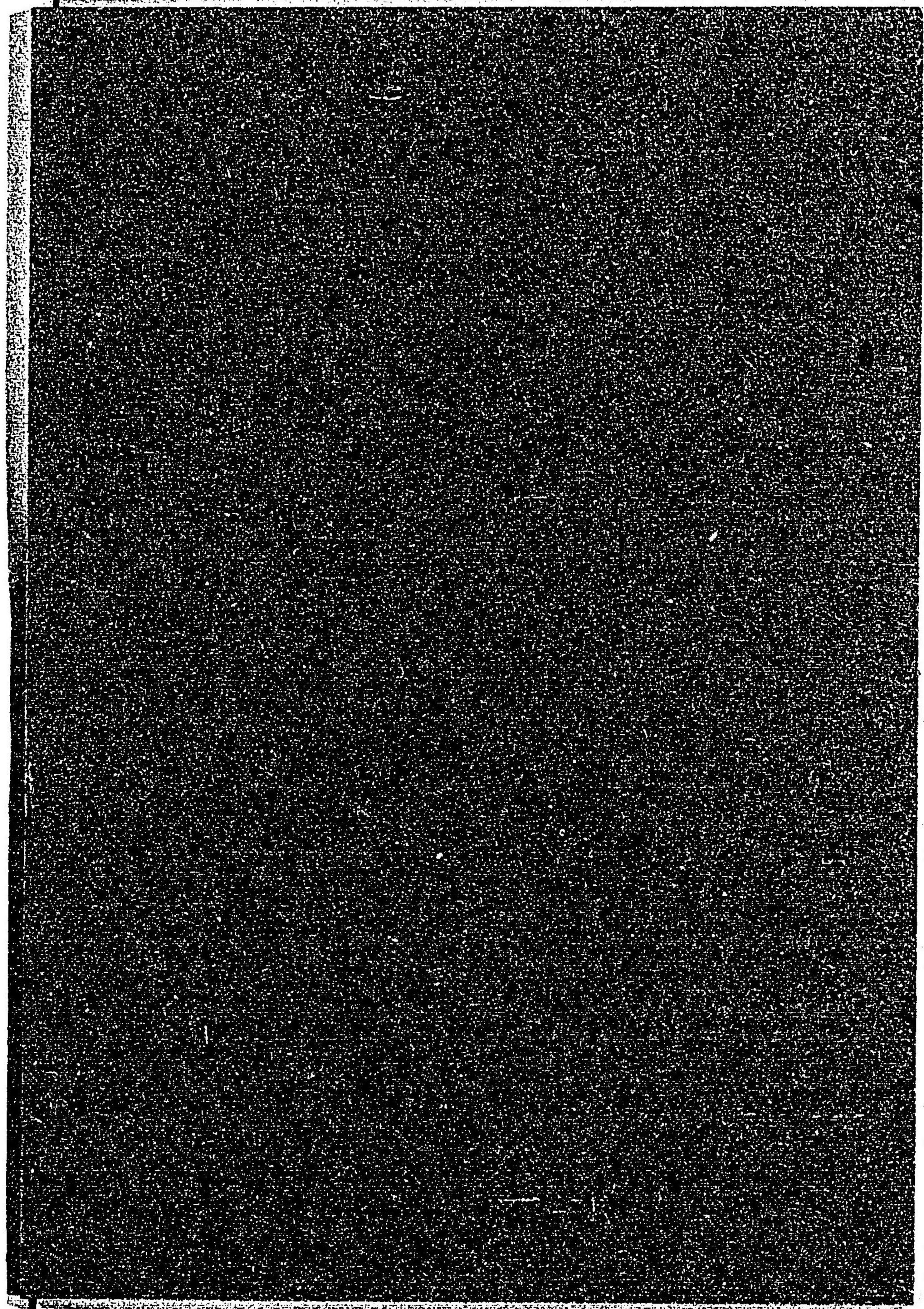
專賣所

大坂東區順慶町心齋橋筋南へ入 兎屋支店



PI 6W-53

同治六年八月廿五日
知縣 王 某
縣丞 李 某
主簿 張 某
典史 趙 某
司馬 孫 某
司庫 周 某
司獄 吳 某
司醫 鄭 某
司藥 陳 某
司膳 楊 某
司廩 黃 某
司倉 劉 某
司庫 孫 某
司獄 李 某
司醫 張 某
司藥 趙 某
司膳 陳 某
司廩 楊 某
司倉 黃 某
司庫 劉 某



019337-000-4

26-214

一休諸国物語図絵

平田 止水/編

M19.8

ABG-0023

